

第 61 回 EASD 参加レポート — 若手の視点から —

今泉 俊則会員

(京都大学医学部附属病院 糖尿病・内分泌・栄養内科)

1. 参加学会

61st Annual Meeting, European
Association for the Study of Diabetes

<https://www.easd.org/annual-meeting/>

2025 年 9 月 15 日(月)~19 日(金) ウィーン (オーストリア)



2. 参加の目的

- 今回の学会での活動目標
国外における最新の糖尿病研究の動向を学び、海外の研究者と直接交流すること
- ブース担当としての期待事項
日本糖尿病学会の国内外における様々な活動をブース来訪者に紹介する

3. 学会参加の体験

- 学会でのブース活動内容
様々な国・地域の医師、研究者、企業の方に来訪頂きました。日本における糖尿病治療の目標、研究者に対する様々な研究・留学助成制度、対糖尿病戦略 5 カ年計画、英文誌 Diabetology International などの紹介を行いました。また、2026 年 5 月に開催予定の第 69 回日本糖尿病学会年次学術集会・第 18 回アジア糖尿病学会学術集会についても情報提供を行い、多くの方々に興味を持って頂きました。
- 参加前の準備
事前に提供いただいた資料を確認し、過去の担当者のレポートを参考に、JDS の活動内容やブース業務の流れを理解して臨みました。
- 特に印象に残ったセッションや研究発表
1 型糖尿病に対する幹細胞由来細胞移植、糖尿病と骨格筋・脂肪組織、 β 細胞増殖に関連したセッション・研究発表
- 海外参加者との交流やネットワーキングの様子
自分自身は、グルコースシグナルと骨格筋に関する基礎研究について Short oral での発表を行い、質疑応答を通して海外参加者との交流・ネットワーキングが出来ました。また JDS ブースに EASD の

president である Chantal Mathieu 先生が訪問され、あたたかい激励の言葉を頂きました。

- ブースに訪れた方々との会話内容やディスカッションのポイント
日本における糖尿病の有病率や、各国での食事療法やインスリン療法の相違点など、国際学会ならではの多様な視点からディスカッションを行いました。また日本糖尿病学会に関するご質問もいただき、様々な活動の紹介を行いました。来訪者の多くが日本への関心を示し、終始和やかな雰囲気でのディスカッションが進みました。

- そのほか渡航の経験談 など
これまで、医学生の頃にオレゴン健康科学大学に 2 週間、初期研修医の頃にコロラド大学に実習・研修のため渡航したことがございました。その他は旅行等で 4 回ほど渡航歴がありますが、海外での学会参加は今回が初めてでした。

4. 学んだこと・成果

- 学会で得られた新しい知見
海外参加者との交流の中で、1 型糖尿病の自己抗体スクリーニングや新規治療に関して新たな知識を得る機会があり、先進的な知識を得ることが出来ました。
- 今後の研究・診療に活かせること
糖尿病と骨格筋に関連した基礎・臨床研究のセッションから、様々な解析手法や着眼点などを学ぶことが出来ました。
- ブース担当を通じて感じた JDS のプレゼンス向上のための改善点 など
英文誌 Diabetology International をブース来訪者に紹介する際、2025 年に同誌に掲載された「先進医療機器により得られる新たな血糖関連指標に関するコンセンサスステートメント」の英語版に興味を持たれる方が比較的多く見られました。また、2026 年の JDS/AASD 学術集会にも興味を持つブース来訪者が多く、国際学会と連携することの重要性を実感しました。このように日本糖尿病学会の様々な活動を、特に学術的な観点で世界へ発信していくことこそ、JDS のプレゼンス向上に資するのではないかと感じました。

5. 今後の抱負

- 糖尿病の医師・研究者としての展望
私は大学卒業後、初期研修から約 10 年間を市中病院の勤務医として過ごしておりました。当初は一般内科・総合内科的な臨床業務に従事することが多かったですが、少しずつサブスペシャリティの研鑽へ移行しました。卒後 7 年目から社会人大学院生となり、市中病院での臨床業務と並行してではありましたが、基礎研究に従事始めました。大学病院という学術的な環境に本格的に身を置き始めたのはまだ



2 年ほどで、研究者としてはまだまだ学ぶべき部分があると考えています。今後は臨床医としてだけでなく、基礎・臨床研究についても一層知識を深め、先進的な発信が出来るような研究者として研鑽を積みたいと考えています。

- 学会活動に対する意欲

2025 年春より、単一遺伝子糖尿病の調査研究委員会事務局を担当させて頂くこととなりました。本調査研究によるこれまでの研究成果は 2025 年に国際学術誌に掲載されたところですが (J Clin Endocrinol Metab. 2025 Aug 25;dgaf478.), 今後さらに発展的な研究成果を発表していくように、本調査研究に取り組んで参ります。



- 次世代へのアドバイスや提案 など

今回 EASD に参加し、国際学会への参加は、学術的な活動を始めたい、継続したいという強いモチベーションに繋がる大変貴重な機会であると感じました。しかしながら、既に研究活動のある程度行っている医師・研究者でない限りは、演題発表なく単に国際学会に参加するだけ、というのは、昨今の物価高騰の影響からも、ますますハードルが高くなっているかと思います。そのような若手医師・研究者の方々こそ、JDS による「若手研究者の海外学会参加支援」を活用し、まず海外学会に参加してみる、という経験をして頂くことをご提案します。ブース業務の日時は柔軟に調整可能なうえ、特に参加したいセッションがある場合には、配慮もしていただけます。国際学会に参加した経験を原動力として、基礎・臨床研究に取り組み、その成果を国際学会で発表していくことで、医師・研究者としての成長に繋がると思います。

6. その他

- 感想

このたびは、海外学会参加支援を頂き、誠にありがとうございました。EASD へ参加し、国内学会とは異なる様々な刺激を受けることが出来ました。また JDS ブースでの役割を通して、JDS の様々な活動が有する意義を理解し、さらには単に国際学会に参加するのみでは得られなかった国際的交流も経験出来ました。今回の経験を糧に、さらに医師・研究者としての研鑽を積みたいという意欲が高まりました。ご支援を賜りました JDS の諸先生方、事務局・関係者の皆様に、厚く御礼を申し上げます。今後、糖尿病の研究に従事する若手医師・研究者が、国際的な交流・発信を行う意欲を高く保てるような機会が、今後も継続的に提供されることを願っております。

第 61 回 EASD 参加レポート

— 若手の視点から —

大森 一乃会員

(北海道大学 免疫・代謝内科学教室)

1. 参加学会

61st Annual Meeting, European
Association for the Study of Diabetes

<https://www.easd.org/annual-meeting/>

2025 年 9 月 15 日(月)~19 日(金) ウィーン (オーストリア)



2. 参加の目的

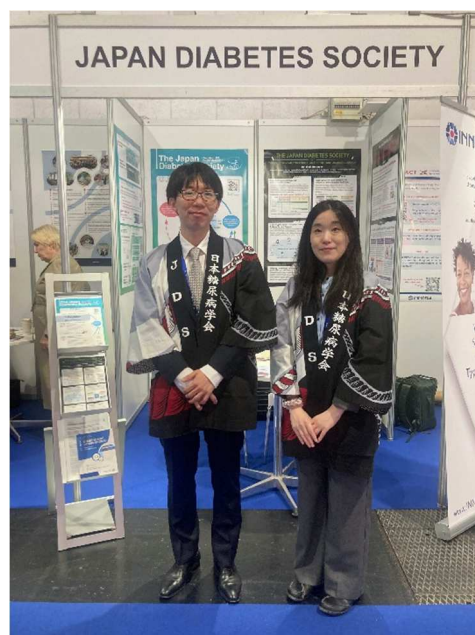
今回の学会では、JDS の活動内容や日本の糖尿病診療の現状を国際的に紹介し、2026年5月に開催される AASD2026 への関心を高めることが主な目標でした。ブース担当としては、来訪者との対話を通じて日本の診療ガイドラインや糖尿病予防への取り組みを分かりやすく伝えるとともに、文化的な親しみやすさも演出することで、JDS の魅力を多角的に伝えることが期待されていました。

3. 学会参加の体験

会期中は、欧州、アジア、南米、アフリカなど多様な地域からの参加者がブースを訪れ、JDS の活動や AASD2026 について関心を寄せてくださいました。特に多かった質問は、「日本の最新の糖尿病診療ガイドラインの英語版はあるか?」というもので、その他にも糖尿病予防の取り組み、英語版教育プログラム、2 型糖尿病に対する日本での治療薬の処方状況、MASH に対する最新治療、CGM に関する Diabetology International 掲載論文など、日本発のエビデンスに対する注目度の高さを実感しました。また、日本の糖尿病人口や1型糖尿病の割合、CGM 導入率、治療方針など疫学的・臨床的な質問も多く、事前に準備して頂いたパンフレットや資料を活用しながら、幅広いディスカッションを行いました。資料の事前確認やスケジュール調整を工夫することで、充実した準備ができました。ブースでは、北斎の浮世絵が描かれた JDS のポケットティッシュや折り紙の鶴など、日本文化を感じられるノベルティも好評で、準備した分はすぐに配布終了となるほどの人気でした。日本を訪れた経験のある医療関係者も多く、日本の観光スポットに関する質問も寄せられ、ホスピタリティにあふれたブースとして印象に残ったようです。

4. 学んだこと・成果

一番驚いたのが Lab Talk が TED のように円形の会場で行わ



れていたことでした。聴衆との双方向的なやりとりが印象的でした。また留学中に研究していた膵β細胞のミトコンドリア機能についての発表も非常に興味深く拝聴しました。

日常診療に関しては、糖尿病管理におけるテクノロジーの進化は著しく、患者教育や治療方針の個別化において、CGMとAIの統合的な解析などのデジタルツールの活用が今後さらに重要になると感じました。

ブース担当を通しては日本発のエビデンスに対する注目度の高さを実感しました。

英語版コンテンツの拡充として診療ガイドライン、教育資料、Diabetology Internationalの論文紹介など、英語での発信が求められる場面が多く、JDSとして体系的な英語版コンテンツの整備が必要と感じました。

浮世絵の描かれたティッシュや折り紙など、伝統的な日本文化の紹介は非常に好評でした。今後は、科学的情報と文化的親しみやすさを融合させたブース設計が、国際的な印象向上に寄与すると考えます。今後公募されたJDSのマスコットキャラクターなどを広報に取り入れるのもいいかもしれません。

ブースでの質問は多岐にわたり、疫学・治療・日本の医療保険制度・文化など幅広い分野に及びました。事前にFAQを準備することで、よりスムーズな対応が可能になると感じました。またどの国からブースを訪れたかを記録するのが大変でしたので、世界地図を用意してそこにシールを貼ってもらう形式をとるのはどうかと考えました。

5. 今後の抱負

糖尿病は、単なる血糖コントロールにとどまらず、心血管疾患、腎症、認知症など多臓器にわたる影響を及ぼす全身性疾患です。今後は、時間生物学や代謝酵素のリズム制御といった視点を取り入れ、より個別化された治療戦略の構築を目指したいと考えています。特に、「いつ内服、注射するか」「いつ運動・食事をするか」といった時間軸の最適化が、患者さんのQOL向上に寄与する可能性を強く感じています。また、基礎研究と臨床現場をつなぐ「橋渡し役」として、日本発のエビデンスを世界に届けることにも力を入れていきたいです。英語での情報発信や国際共同研究への参画を通じて、グローバルな視点で糖尿病医療の進展に貢献していきたいと考えております。

今回のEASD2026でのJDSブース担当を通じて、国際学会は単なる情報収集の場ではなく、対話と共創の場であることを実感しました。今後も、国内外の学会に積極的に参加し、研究成果の発信とネットワーキングを通じて、学術的・社会的インパクトのある活動を展開していきたいと考えています。また、学会運営や広報活動にも関わることで、日本糖尿病学会の国際的プレゼンス向上に貢献し、次世代の研究者が世界に羽ばたくための土壌づくりにも携わっていきたいです。糖尿病研究は、分子生物学から社会医学、AIやデジタルヘルスまで、多様な視点が交差する学際的なフィールドです。若手の皆さんには、専門性を深めると同時に、異分野との対話を恐れず、柔軟な発想で研究を楽しんでほしいと願っています。

EASDに参加して少し寂しかったことに、今回学会のホールに各



国の都市名のホールの名前がついていたのですが、北京やムンバイはありましたが、日本の都市名のホールはなかったことです。日本も EFSD など交流プログラムがありますので、今後 EASD でもプレゼンスを発揮するとともに、自身も研究をすすめ、発表の機会を得たいという強い動機になりました。

ブース担当の日本糖尿病学会事務局学術交流委員の堀様には大変お世話になりまして、ありがとうございました。また今回推薦してくださった中村昭伸先生をはじめ、現地のブースで声をかけてくださった諸先生方、ご支援いただきました糖尿病学会の皆様に深く御礼を申し上げます。

日本糖尿病学会 国際交流委員会
EASD 2025 Associations' Village ブース出展報告書

作成日：2025 年 9 月 26 日

出張者：事務局 堀

◆ スケジュール

出展先：The 61st EASD Annual Meeting 2025 in Vienna, Austria

設営日：2025 年 9 月 15 日（月）

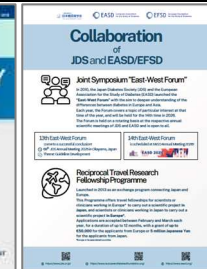

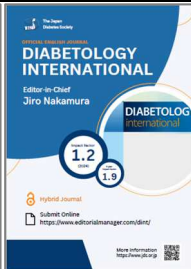


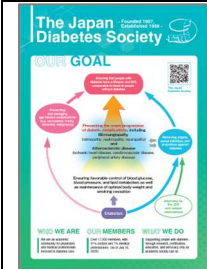
公開日：2025 年 9 月 16 日（火）～19 日（金）9:00～18:00 ※最終日 14:00 まで

会 場：ブース番号 23, The Community Plaza, Hall B



◆ 展示物

掲示物	学会活動紹介ポスター（2 枚組） 第五次「対糖尿病戦略五ヵ年計画」紹介ポスター（2 枚組） 第 69 回年次学術集会ポスター・プロモーションビデオ
配布物	学会活動紹介チラシ 第五次「対糖尿病戦略五ヵ年計画」紹介チラシ 第 69 回年次学術集会チラシ 英文誌 Diabetology International (DI) 紹介チラシ 英文論文別刷り 1 種、DI 見本本 EASD・EFSD との共同事業紹介チラシ 英語問い合わせ用ビジネスカード（各約 50 部、全て英語版）
ノベルティ	ポケットティッシュ（浮世絵柄）、和紙折り紙



◆ 担当者

事務局員 1 名、会員からの公募担当者 2 名

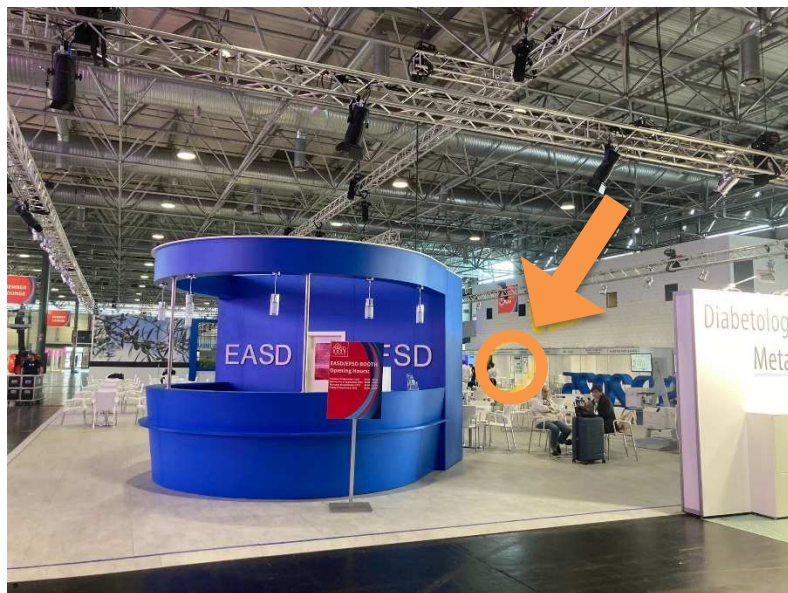
◆ ブース担当者の公募

若手会員の海外学会参加支援策として、理事・監事の推薦にてブース担当要員を募集し、2 名が選出された。JDS から旅費・大会参加費の支援を行い、学会のブース駐在担当をしながら学会に参加した。

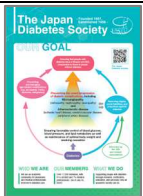

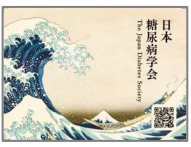
- 大森 一乃会員（北海道大学病院 糖尿病・内分泌内科）
- 今泉 俊則会員（京都大学大学院医学研究科 糖尿病・内分泌・栄養内科学）

◆ ブース設置エリア

EASD 所属団体のブースはエキシビションホール（企業展示、スポットライトステージなどのエリア）の右手側入り口近く Community Plaza の一画として設置され、計 36 団体のブースが設置された。本学会のブースはテーブルエリアと EASD 会員向けのラウンジの正面に位置し、休憩や作業する一般参加者が多く行きかう位置にあった。



◆ 展示・配布物への反応（抜粋）

学会活動紹介	EASD・EFSD との 共同事業紹介	英文誌紹介・別刷り	ノベルティ
			
構成を簡略化したことで資料の見通しが良くなり、導入説明用としても要点を端的に示すことができた。	口頭説明に加えて手元資料を用いることで、事業の認知度が向上し、欧州から事業協力に関する問い合わせがあった。	欧州・中東からの論文投稿が増加していることを踏まえ、オープンアクセス出版と無料出版の 2 つのオプションを提示することが有効であった。	新規作成したポケットティッシュ（安価で大量生産可能）は予想以上に来場者の注目を集め、広報活動を活性化させる呼び水となった。

◆ ブース来訪者数（日別）

1 日目：9 月 16 日 約 44 名

2 日目：9 月 17 日 約 31 名

3 日目：9 月 18 日 約 14 名

4 日目：9 月 19 日 約 5 名

※企業エキシビションが 3 日目で終了のため、12 時に撤収

アジア	イラク、カンボジア、キルギス、インド、バングラデシュ、フィリピン、パキスタン、日本
中東	エジプト、トルコ
アフリカ	アルジェリア、ケニア、ナイジェリア
ヨーロッパ	イタリア、オランダ、チェコ、ドイツ、フランス、ボスニア、ルーマニア、リトアニア、スペイン、スウェーデン、イギリス
北アメリカ・中南米	カナダ、アメリカ、アルゼンチン、チリ
オセアニア	オーストラリア

◆ 来訪者からの主な質問

【糖尿病患者数・治療・機器関連】

- 日本の糖尿病人口・1型糖尿病の人数
- 保険適用治療の範囲、1型・2型ともに保険適用かどうか
- 糖尿病の予防・日本の食事と糖尿病の関連
- CGMの利用者数・市場規模

【専門医・教育関連】

- 専門医制度とは・専門医の数
- 国外への教育コンテンツ提供の有無、提供の可能性
- 会員向け教育プログラムの種類

【学術集会・EASDとの共同事業関連】

- トラベルグラントとその応募方法
- 学術集会に招待演者として参加する方法
- 日本・アジア圏の学術集会に関する情報
- 英語プログラムはあるか
- 医師・医療従事者以外向けのプログラム（患者向け・学生向け）の有無
- 他のアジアの国際学会の開催情報（AASD2026、ICE/JES2026、ATTD2025）
- 次回共同シンポジウム（East West Forum）の開催時期
- EFSD 交換留学へのホストとしての参加方法

【Diabetology International /学会の発表物関連】

- DIへの投稿料、非会員の投稿資格、採択率、判定日数
- 最新のMASHのRecommendationはあるか
- 最新のガイドラインはあるか

◆ 今後に向けて

- 今回も日本人の参加者は少ないように感じた。ブース担当者の若手会員からも、発表が無ければ経済的・時間的理由から渡航は難しい実状があるとされ、本施策の継続の必要性を感じた。

- 若手会員の公募は、理事・監事推薦のみならず会員全体に順次拡大し、大学のみならず市中病院など意欲ある臨床の会員まで応募機会を得ることが期待される。
- 年次学術集会は直近のみではなく２年後まで情報があるとよい。
- 人員配置、滞在日程の見直しで引き続き滞在経費の最適化を継続する。

以上